

句会を通して育成する論理的思考力

—作品の世界観を味わう俳句の学習を通して—

市 原 まゆ美

1. はじめに

2021年度より全面実施される中学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現」が重要視されている。また、言語活動を充実させることにより、「思考力・判断力・表現力の育成」が求められている。ところが、伝統的な言語文化に関する指導では、解釈中心の指導であったり、音読や朗読、暗唱に力を注いだりするような知識・技能に関する指導が多いのも実状である。このような学習状況における授業改善が重要であると考えた。

そこで、本研究では句会という学習形態で、創作・相互鑑賞、批評を行い、解釈に重きを置くのではなく、句の世界観に思いを馳せ、その世界観について根拠や理由を示しながら説明させることで、論理的思考力を育成することを目指した。

2. 指導の実際

①実施学年 中学3年

②教材名 「俳句の可能性」「俳句を味わう」(光村図書 国語3)

③授業目標 ・俳句の豊かな表現力に気づき、簡潔な表現に込められた多様なものの見方や感じ方を味わう。
・俳句の学習を通して、一つひとつの言葉について思考し、言葉や表現を手掛かりとして、論理的に作者の心情に迫る。

④教材について

俳句は、今日まで継承されてきた日本文学の代表的な伝統的言語文化の一つであり、世界的にも広く知られた短詩型文学である。

本教材は、俳人宇多喜代子による解説文「俳句の可能性」と、「俳句を

味わう」によって構成されている。解説文「俳句の可能性」は、優れた俳句作品を例に、定型や季語などの約束事をわかりやすく解説している。無季俳句や自由律俳句にも言及しており、近・現代の俳句のおおよそを理解することができる。選ばれた作品は中学生にとってわかりやすい語彙で表現されており、生徒たちの心に響くものであるといえる。俳句についての基本的な知識を理解させながら、多様性をもった近・現代俳句に触れ、作品を読み味わわせたい。

また、「俳句を味わう」には9人の俳人の個性豊かな四季の作品が記載されており、俳句の様々な魅力を感じ、自由な解釈で鑑賞することができる。俳句の多様な魅力を知り、「言葉による見方・考え方」を働かせた鑑賞を行うことで、生徒たちがそれぞれ自分の心に響く作品を見出していくプロセスを大事にしたい。「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。語釈や解釈は生徒の疑問を解決する程度とし、各自がそれぞれの感性で句を受け止め、詩的な言葉、伝統的な言葉との出会いを豊かにしていく。そして、言葉を絞り込み説明させることにより、論理的思考力を働かせた批評をすることを目指す。

本教材では、日本の代表的な言語文化の一つである俳句の豊かな表現力に気付かせ、簡潔な表現に込められた多様なものの見方や感じ方を味わわせたい。そこで、俳人の作品を鑑賞した後、生徒たちは自らの作品においても読み味わうことで、より言葉との出会いを豊かにし、論理的思考力を身に付けさせたいと考える。

まず、俳句に描く場所を校内と限定し、教室だけでなく、グラウンドや初等部のエリアにある「ふぞくの森」(ビオトープ)等の場所から、生徒たちに思い描く景色を俳句で表現させる。校内という同じ場所で句を詠むことにより、討議の際に他の生徒たちも同じようにイメージでき、それに対して思いを巡らすことができる。

そして、4～5人のグループで団体戦に投句する一句を選ぶ。その際、選んだ俳句をグループで討議しながら、推敲しリライトさせる。討議の中では、俳句から思い描く情景に着目し、よりその情景が伝わるように

表現を推敲させる。前時までにこのようにして創作した俳句を用い、本時では句会を行う。俳句鑑賞のポイントについては、俳句を専門とする外部の講師を招き、より専門的な知識を身に付けさせておく。句会にもその形式や方法は様々であるが、本時においては「句合」とし、予め指定された2班から、一句ずつ句を披講し合い、その優劣を競い合う。なお、披講とは創作した俳句を読み上げ披露することである。声に出して読み上げることで、言葉の響きやリズム感というものも大事にしたいと考える。

⑤指導計画（全8時間）

- ・第1次 「俳句の可能性」 近・現代俳句に触れ、俳句についての基本的な知識を理解し、作品を読み味わう。（2時間）
 - 第1時 「俳句の可能性」を通読し、俳句の基本的な知識について理解し、筆者の主張を把握する。
 - 第2時 俳句を鑑賞し、作品に詠まれた情景や心情を読み味わう。
- ・第2次 「俳句を味わう」 自由な解釈で俳句を鑑賞する。（2時間）
 - 第3時 「俳句を味わう」から自分の心に響く俳句を見つけ、その情景や心情を思い描く。
 - 第4時 自分が選んだ俳句の魅力を交流し合う。
- ・第3次 俳句創作 俳句を創作し、相互鑑賞、批評を行う。（4時間）
 - 第5時 俳句の鑑賞・批評の仕方について考える。
 - 第6時 校内で、自分の見た風景や感じたこと、体験したことなど、題材を探し、俳句を創作する。
 - 第7時 個人で創作した俳句をグループで鑑賞し、一句選んでグループで推敲する。
 - 第8時 前時にグループで創作した俳句を披講し、句会を行う。（本時）

⑥本時について

(1) 本時の目標

- ・句会を通して、俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりに、作品の世界観を豊かに想像し、その世界観を味わう。

- ・作品の魅力や世界観を聞き手が納得できるように、根拠や理由を示しながら自分の考えを説明する。

(2) 指導法

第1次で俳句についての基本的な知識を理解し、作品を読み味わい、第2次で自由な解釈で俳句を鑑賞する。そして、第3次で俳句を創作し、相互批評を行う。句会という形式を活用し、句を論理的に鑑賞・批評することでその作品の世界観に迫らせ、また、根拠や理由を示しながら自らがイメージした世界観を説明できる力の育成を目指す。句会では、披講された句の解釈を重視させるのではなく、作者のイメージした俳句の世界観に、自分たちのイメージをいかに近づけていけるかということを意識させて句の解釈、鑑賞を行わせたい。俳句へのイメージを膨らませなければならない「句会」を授業に取り入れ、イメージ豊かに俳句を読み味わわせ、確かな鑑賞力を身に付けさせたいと考えている。

また、句会での言葉による見方・考え方を働かせた鑑賞・批評ができれば、中学校学習指導要領第3学年「A 話すこと・聞くこと」(1)「ウ 聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。」、 「C 読むこと」(1)「ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。」、 「エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。」を達成することができる。「話すこと・聞くこと」については、聞き取った内容や表現の仕方を評価し、その優れている点を取り入れて、自らの表現をよりよいものにしていくことが大切である。また、「読むこと」においては、比較をすることにより、様々な表現の特徴や効果などについて評価することで自らの表現に役立てていき、そこに表れているものの見方や考え方から、人間、社会、自然などに思いを巡らせ、豊かな心情が養われ、人間としての成長が期待される。

本時に行う「句会」では、前時に、グループで推敲した俳句を披講し、その優劣を2つの班で競い合わせる。俳句を披講しない班は、披講された俳句を読み、鑑賞・批評を行い、その優劣を考える。

句の優劣を判定するためにまず、生徒たちは披講された二句を読み、どちらの俳句がどのように優れているのかという疑問に直面し、その課

題解決に向けて「論理的思考力」を身につけ、作品を多面的・多角的に捉え、主体的・協同的に学習していく見通しをもつ。【着眼】

次に、披講された俳句について論理的思考で鑑賞・批評を行う。その後、班内で、それぞれの鑑賞、批評を発表し、議論する中で新たな気付きや、考えを深めることができる。グループ学習を通して、披講された二句の俳句に対するイメージを豊かにし、より深い鑑賞を行う。【分析】

最後に、他の班から意見や考えを聞き、改めて自分たちの班内で俳句の鑑賞をする。優れている点はどのようなところか、どのようにリライトすれば、より世界観と作者の心情を伝えることができるようになるかなど、根拠をもって論理的に説明できるようにする。【一般化】

(3) 分析時の思考タイプとその指導法について

本時では、生徒の思考のタイプを以下の3タイプに分類し、学習活動を行う。

【A タイプ】 披講された俳句を鑑賞し、言葉や表現を手掛かりに、言葉による見方・考え方を働かせて想像豊かに読むことで俳句の世界観を構築し、その世界観から優劣の判定を行う。

【B タイプ】 披講された俳句を鑑賞し、そこに用いられている表現技法や、言葉の一つひとつに着目し、内容の解釈を行い、その解釈をもとに優劣の判定を行う。

【C タイプ】 披講された俳句を鑑賞し、直感や感覚、自らの体験など経験的な考えや判断をもとに俳句を読み、その経験をもとに優劣の判定を行う。

俳句の学習を行うと、表現技法や用いられている言葉の一つひとつにこだわり、細かい解釈を行う B タイプの生徒が多くいる。言葉の意味や内容が理解できないと感じるのかもしれない。しかし、言葉の一つひとつの意味や表現の内容を理解しようとしすぎるあまり、俳句を読み味わうという本来の目的が達成されないということも考えられる。用いられている言葉を理解し、表現技法にも着目することは大切であるが、俳句の鑑賞において大事なことは、一語一句の細かい解釈をすることではなく、「五・七・五」の十七音という厳選された言葉を手掛かりに想像豊かに読み味わうことであると考えられる。また、作品の世界観をより

深くイメージし、いかに作者の心情に近づけるかということが大切であるといえる。自らの経験や知識、想像力、すべてを働かせて作品の世界観に迫る必要がある。

したがって、心象を重視する A タイプのような生徒は、作者の世界観に一番近づくことができる生徒であるといえる。しかし、想像豊かに俳句を読むためには、B タイプの生徒のように、ある程度の言葉の解釈も必要であり、表現技法に着目することも大切である。また、C タイプの生徒のように、直感的なイメージや感覚、これまでの自らの経験と照らし合わせるというのも俳句を想像豊かに読むためには必要である。自分勝手な解釈では意味がなく、それぞれのタイプの生徒が意見を出し合い、俳句に用いられている言葉を手掛かりにして想像豊かに読み味わうことが大切である。

(4) 本時の展開

分節	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点
I 着 眼	・ 前時の学習を振り返る。 ・ 句会の準備を行う。	・ 前時の学習内容を確認する。 ・ 本時は句会を行うことを伝え、準備をさせる。
	句会を行い、2チームから披講された句を読み味わう。 ・ 各チーム句を披講する。 ○個人学習 ・ 披講された二句の俳句を読み味わい、二句の優れている点、劣っている点を考える。	・ 句を披講させる。 ・ 披講された二句の俳句を読み味わい、二句の優れている点、劣っている点を考えさせる。
II 分 析	披講された二句の俳句の優劣を考える。 ・ 自分の班の俳句を解説する。	・ 自分の班の俳句を解説させる。

Ⅱ 分 析	○グループ学習 (俳句披講班以外) ・ 着眼の過程で考えた自分の考えをもとに、班で俳句の優劣を協議する。 ・ どのような観点で俳句の優劣を判定するのかを考える。 ・ 各班が述べた意見を判定の観点として参考にする。 (俳句披講班) ・ 班内で俳句の解釈を改めて行い、終了すれば他の班に回り、質問を受けたり、説明をしたりする。また、自分たちの俳句を支持してくれる班を探す。	・ どのような観点で俳句の優劣の判定を行えばよいかという疑問を持たせる。 ・ グループで披講された俳句についての意見を出させる。 ・ 言葉や表現，解釈から評価をしているようであれば，イメージを膨らませ，俳句に描かれている世界観を広げるように助言する。 ・ 班内で再度俳句の解釈をさせる。また，それが終了すれば，他の班を回り質問を受けたり，説明したりさせる。 ・ 自分たちの班の俳句を支持してくれる班を探させる。
Ⅲ 一 般 化	○全体学習 ・ 披講された二句の俳句の優劣を判定する。 ・ 判定チームがその判定理由を述べる。 ・ 判定理由には必ずその根拠を示す。 ・ 他の判定者の意見を聞き，自分たちが気付かなかったこと，改めて考えたことについて考えを深める。 ・ 改めて二句の俳句について，詠まれている情景や作者の思いをイメージする。	・ 披講された二句の俳句の優劣を判定させる。 ・ 判定チームに，判定理由を述べさせる。 ・ 判定理由として，必ず根拠を示させる。 ・ 他の判定者の意見を聞き，自分たちが気付かなかったこと，改めて考えたことについて考えを深めさせる。 ・ 改めて二句の俳句について，詠まれている情景や作者の思いをイメージさせる。

Ⅲ 一般化	・ 本時の振り返りを書く。	・ 本時で身につけた力について振り返り、今後の学習につながる視点を意識させる。
----------	---------------	---

(5) 本時の評価

- ・ 俳句の豊かな表現力に気づき、多様なものの見方や考え方を広げることができたか。
- ・ 俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりとし、句のイメージを豊かに想像し、作品の魅力や世界観を聞き手が納得できるように根拠や理由を示しながら説明できたか。

3. 成果と課題

本授業では、句会を通して、言葉や表現を手掛かりとして、根拠や理由を示しながら鑑賞・批評をし、作品の世界観に迫り、俳句を読み味わわせた。句会では、披講された句の解釈を重視させるのではなく、作者の世界観に自分たちのイメージした世界観をいかに近づけていけるかということを



個人学習の様子

意識させて句の解釈、鑑賞を行わせた。つまり、言葉の一つひとつの意味を理解したり、表現の解釈に重きを置いたりするのではなく、想像力を働かせて、描かれている情景を具体的に思い浮かべたり、作品に込められている作者の心情を詳しく表現したりすることを重要視した。句を論理的に鑑賞・批評することでその作品の世界観に迫らせ、また、根拠や理由を示しながら自らがイメージした世界観を説明できる力の育成を図った。

まず、着眼の過程において、クラスの代表となる2つのグループに、それぞれ前時までに創作した俳句を披講させた。その際、声に出すこと

によってリズム感なども意識させることができた。前時までの学習活動をよく観察しておき、披露班は、分析の過程で様々な疑問や鑑賞・批評の観点がたくさんあると思われる作品のものにした。

次に、分析の過程では、グループで二句の優劣を考えさせた。披露班は自分たちの句を更に深く鑑賞・批評すると共に、相手の句についても鑑賞・批評し、後にグループで意見を共有できるようにした。また、披露班以外は、それぞれの俳句において、着目した言葉や表現、句のイメージなど作品の世界観を捉え、作者の心情に迫らせた。まず、個人活動で、着眼の過程でもった視点や観点、疑問等から、披露された俳句を分析させた。(図1) 歳時記を用いて季語の解説や例句を参考にし、作品のイメージを広げ、その世界観に迫ろうとする姿が見られた。

そして、グループで分析を進め、作品の世界観や心情に迫らせた。この時、1グループは4～5名で構成し、分類した思考のタイプがそれぞれいるかたちにした。そうすることにより、3タイプの思考がぶつかり合い、互いの考えが深められると考えた。グループ学習では、それぞれの俳句におけるイメージや世界観について話し合い、句から受ける作品の世界観や作者の心情について論理的思考力を駆使し鑑賞・批評することで、どちらの句がどのように優れているのかを議論させた。

披露 A「はく息で 白く色づく

B 少し白くみえてくらくらした放課後の校門 前で丁わかしい子もたちと鳥たちの様子を 想像できた。	A はく息で 白く色づく 冬道し 思いがけなく白くみえてくらくらした放課後の校門 想像できた。
少し白くみえてくらくらした放課後の校門 前で丁わかしい子もたちと鳥たちの様子を 想像できた。	はく息で 白く色づく 冬道し 思いがけなく白くみえてくらくらした放課後の校門 想像できた。

(図1)



グループ学習の様子

く「冬近し」において、はく息「が」と、はく息「で」とでは作品の世界観が変わってくると分析していた。はく息「が」とすると、白くなるのは息だけで、はく息「で」とすると、周りの空気、町の様子や景色が白くなるという。

披露B「椋鳥は 群れて家路の 子らの声」において、その場には椋鳥がいるのか、子どもたちがいるのか、それとも両方いるのかなど想像が膨らんでいた。対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高め、深い学びができていたと考える。そして、一つひとつの言葉について思考し、言葉や表現を手掛かりとして論理的に作者の心情に迫ることができていたといえる。言葉による見方・考え方を働かせ、自分の感性に基づいて議論をする生徒の姿が見られ、前時までの推敲や創作などの過程が表れていると感じた。

一般化の過程では、改めて披露された二句の俳句について、詠まれている情景や作者の思いをイメージさせた。そして、二句の俳句の優劣について、披露班以外のグループでそれぞれ判定させた。その際、判定理由を述べ、根拠を示させることにより、自分たちが気付かなかったこと、改めて考えさせられたことなどについて考えを深めていた。また、グループの中でも意見が分かれていたところには、どのような理由でその判定になったのかなど意見を述べさせた。このような活動を通して、俳句の解釈に関して、「一般化」



全体学習の様子

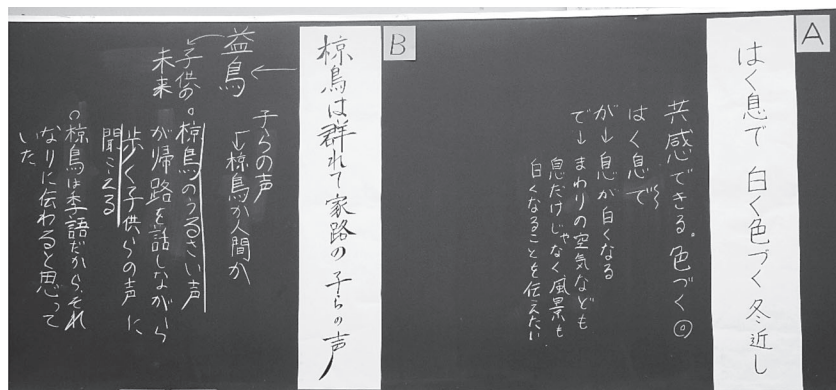


判定の様子

を行っていった。

着眼で考えた自らの解釈が、分析の過程で変化し、作品の世界観や作者の心情に変化が生じる生徒も現れた。さらに、生徒たちの振り返りを読んでみると、ほとんどの生徒が根拠を明確にしながら説明できており、中学校学習指導要領第3学年「A 話すこと・聞くこと」(1)「ウ 聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。」、 「C 読むこと」(1)「ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。」、 「エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。」を達成することができた。

そして、句会という学習形態で、言葉や表現を手掛かりとして、根拠や理由を示しながら論理的に鑑賞・批評することで、論理的思考力を育成できた。



生徒による板書

4. おわりに

本実践前に、俳句に関する意識調査を行ったところ、「俳句の学習は好きか。」という問いに対して、「大好き」や「好き」と回答する生徒は24%、「好きでもきらいでもない」という生徒が62%、「きらい」という生徒は14%であった。次に、俳句の学習が「大好き」や「好き」という生徒に理由を尋ねたところ、「他の人のいろいろな感じ方、考え方に接することができるから。」という生徒が31%、「俳句という表現の仕方が好

きだから。」という生徒が24%であった。また、「きらい」と回答する生徒の理由としては、「俳句を創ることが苦手だから。」という生徒が38%、「イメージが思い浮かばないから。」という生徒が21%であった。さらに、「俳句の学習において必要なものは何か。」という問いに対して、「作品の世界観を想像すること」と回答した生徒が69%と最も多く、「自分たちの実体験や感覚に照らし合わせること」とした生徒が28%であった。

意識調査の結果から、生徒は俳句の学習において、作品を通して他の人の様々な感じ方や考え方に触れられるのがよいと捉えているといえる。また、俳句の創作において、イメージが思い浮かばない生徒もいる。俳句の学習において必要なものは、作品の世界観を想像することだと考えている生徒が多くいることから、他の人の考えに触れながら、イメージを膨らませ、作品の世界観を想像できるようにしたいと考え、本実践を行った。

作品に込められた作者の心情や世界観に迫ることは容易ではない。だからこそ、作品に用いられている言葉や表現から、根拠を示し、理由を述べる必要があり、その上で論理的思考力の育成が求められる。本実践では、【着眼】【分析】【一般化】の学習過程を設け、更に俳句の解釈において根拠、理由の明確化を追求したことで、一定の質の論理的思考力の育成が実現したと考えている。

(本学附属京都小中学校教諭)

【参考文献】

- 國原信太郎『「句会」を通して養う論理的批評力と思考力』、2017年、『京都教育大学国文学会誌』第45号、横74-65
- 藤田智之・國原信太郎・森本晏以「コンピテンシーを育てる授業実践－句会を通して－」、2019年、『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第1号、187-195
- 國原信太郎「音読を通して育成する論理的思考力と創造的思考力－音読を起点とする詩の学習を通して－」、2019年、『京都教育大学国文学会誌』第47号、横82-67
- 國原信太郎『「我が国の言語文化に関する事項」の学習評価 俳句の鑑賞における学習評価について』、2020年、『教育科学 国語教育』1月号、明治図書、20-23